

恪
氣
（
り
ん
き
）
の
向
う
側

か
み
た
に
り
き



人物

佃 博 己 (6 7) (4 7) 大学病院院長

小 園 修 二 (4 4) 佃 の 弟 ・ ホ ー ム レ ス

佃 弥 英 子 (6 4) (4 4) 佃 の 妻

佃 淑 子 (6 9) 弥 英 子 の 母

坂 東 フ ミ (6 3) 古 株 ホ ー ム レ ス

田 所 信 (4 6) (2 6) 外科医教授

その他

○慶南大学附属病院・外観

七階建ての建物

○同・院長室

佃博己（67）が、デスクに腰かけ、引き出しの中の擦り切れ、古びた御守りをジッと見ている。佃、引き出しをそつと閉める。

○ホスピス「やすらぎ」・敷地内

春の日差しが降り注いでいる。

満開の桜並木を、佃弥英子（64）が乗った車椅子を押しながら歩く佃。

弥英子は痩せ細り、首筋や手の甲に青筋が浮き上がっている。

佃、立ち止まり、桜を見上げる。

風が吹き、桜吹雪が舞う。

弥英子、うつろな目で桜を見ながら、

弥英子「（消え入りそうな声で）桜が見られるのも、これが最後かもね」

佃 「……」

風が強く吹き始める。

佃 「冷えてきたな。もう中に入ろうか」

佃 、車椅子を押しながら再び歩き出す。

○慶南大学附属病院・手術室

波形を打つ心電図。

手術台には酸素マスクを付けた初老の

男性の姿。

手術着姿の佃と田所信（46）、研修医

（26）ら数名のスタッフが男性のオ

ペ中。

佃 「鉗子」

佃 、手際よく手術をこなしていく。

○同・同・前廊下

佃 、手術用の帽子とマスクを外し、長

椅子に身を投げ出すように座る。

佃 、眼鏡を外すと、目頭を押さえ、大

きく鼻から息を吐く。

○同・手術準備室

田所と研修医が並んで手を洗っている。

研修医「やっぱ、院長って凄いつすね。あの

年であんな完璧なオペするんですからね」

田所「ああ、腕は昔からちつとも衰えてない

よ。しかし、奥さんの看病で大変なはずな

のに、よくやるよ」

研修医「奥さんて、大分悪いんですか？」

田所「かなりな。末期癌だそうだ」

田所、エアシャワーで手を乾かす。

○ホスピス「やすらぎ」・弥英子の病室（夜）

トレイに嘔吐する弥英子。

佃、傍らで弥英子の背中を擦ってやる。

弥英子、更に嘔吐する。

○慶南大学附属病院・中庭

セミの声が忙しく響く。

佃と田所が木陰のベンチに腰掛け、缶

コーヒーを飲んでいる。

田所「その後、奥様の容体はどうですか？」

佃「実は、あまり思わしくない。何時どうな

つてもおかしくない状態だ」

田所「そうですか……」

田所、缶コーヒ―に視線を落とす。

女性看護師の声「院長先生！」

若い女性看護師が駆け寄って来て、

女性看護師「奥様が」

佃、立ち上がり、表情を曇らせる。

○ホスピス「やすらぎ」・弥英子の病室（夕）

医者、鼻に酸素の管を通し、意識が混

濁する弥英子の胸に聴診器を当ててる。

佃、傍らで心配そうにその様子を見守

っている。

医者「（首を横に振りながら）残念ですが」

佃「弥英子！！」

佃、弥英子に駆け寄る。

医者「後はお二人だけで。奥様に最後のお別れをしてあげてください」

医者、肩を落としながら、看護師と部屋を出ていく。

佃、弥英子の手を握りながら、

佃「弥英子、すっかりしろ」

弥英子、言葉にならない声を発する。

佃「うん？ どうした？」

佃、弥英子の口元に耳を近づける。

弥英子「へ消え入りそうな声で」しゅ、修二

さん……」

佃、目を大きく見開く。

弥英子の手が、佃の手からするりと抜

け落ちる。

心電図の波形がフラットになり、停止

音になる。

立ち尽くす佃。

○海辺に建つレストラン・外観

T・三か月後。

○同・中

佃、窓際の席に一人座り、食事中。
ガラス張りの窓からは広大な海原が窺える。

向かいの席には、もう一人分の手つかずの料理が並ぶ。

弥英子の声「あなた」

佃、驚いて後ろを振り返る。

後ろの席で、中年女性が、店に入っ

きたばかりの中年男性に手招きし、

中年女性「あなた、こっちこっち」

席に着き、楽し気に話し出す中年夫婦。

佃、向き直り、苦笑い。

○佃の自宅・外観（夕）

二階建ての洋館風の建物。

○同・リビング（夕）

手にコンビニの袋を持った佃が入って
きて、真つ暗な室内を寂し気に見渡す。

○ 同・二階寝室（夜）

衣装ダンスの上には笑顔で写る弥英子の遺影と位牌が飾られている。
佃、クローゼットの中を整理している。
佃、奥にある宝石箱に目が留まる。
佃、宝石箱を手に取り、蓋を開ける。
中には折り畳まれ、セロハンテープで継ぎ接ぎがされた一枚の画用紙がある。
画用紙を開く佃。
画用紙には若い頃の弥英子の横顔を捉えたデッサンが描かれている。
佃、一瞬驚いた表情を浮かべ、デッサンをジッと見詰める。

○ 西多摩霊園

「小園家之墓」と書かれた墓の前で手を合わせる佃。
墓石の側面には「小園修二・享年44才」と彫られている。
佃、顔を上げると、上着のポケットに

右手を入れ、

佃「修二……」

墓石を見詰める。

○東京の街・全景（夜）

色とりどりの灯りが漏れている。

T・二十年前。

○同・コンビニ裏口路上（夜）

アルバイトの青年から、ビニール袋を

受け取る小園修二（44）。

小園は伸び放題の髪に、顔中に髭を蓄

えている。垢まみれの顔をし、着てい

るものもみすばらしい。

小園、袋の中のおにぎりの山を確認し、

小園「いつも、悪いな」

青年「どうせ、廃棄するだけだから」

小園、青年に頭を下げる。

× × ×

小園、おにぎり片手に、路上を歩く。

小園、足が止まり、腹部を押さえると
その場に蹲る。
地面に転がる食べさしのおにぎり。
顔を顰める小園の額に、なま汗が噴き
出る。

○ 佃の自宅・キッチン（朝）

佃（47）がキッチンテーブルで、珈
琲片手に朝刊を読んでいる。
向かいの席では、弥英子（44）と佃
淑子（69）が朝食をとっている。

弥英子は実年齢より若く見える。

淑子「博己さん、今日もまた大きな手術がお
ありなんですよ」

佃「ええ」

淑子「大変ね。でも、腕の立つ大学病院の教
授がウチのお婿さんで、ホント鼻が高い」

淑子、弥英子に向き直り、

淑子「弥英子、母さんの言う通り博己さんを

選んで正解だったでしょ？　もしあの時、

あの男を選んだたら

弥英子「お母さん！！」

弥英子、博己を見る。

淑子「ごめんなさい、博己さん」

佃「いえ。修二、アイツは言われても仕方の

ない出来の悪い弟でしたから」

佃、苦笑いを浮かべる。

○公園

ゴミ箱を漁り、ビニール袋に空缶を入
れていく坂東フミ（63）。

フミの格好はみすぼらしい。

× × ×

小園、ベンチに腰掛け、おにぎり片手

にスケッチブックに鉛筆を走らせる。

空缶の入ったゴミ袋片手に、フミが近

づき、スケッチブックを覗く。

フミ「また、その女かい」

スケッチブックには描きかけの若い女

性（若き日の弥英子）の肖像画。

フミ、小園の隣に腰掛け、
フミ「どっこいしょっと。随分、綺麗な人だ

ね。あんたの昔のこれかい？」

フミ、指先の空いた軍手の小指を立てる。

小園「……」

小園、黙々と鉛筆を走らせる。

フミ、小園の傍の袋のおにぎりを横目

で確認。

フミ「訳アリってとこだね」

フミ、正面を向いたまま、おにぎりに

右手を伸ばしていくが、小園は気づい

ていない様子。

おにぎりを掴むフミの右手。その手を

上から押さえつける小園の左手。

小園「（ニタッと笑い）駄目」

フミ「（笑い返し）一つだけ」

小園、フミの右手を更に強く掴み、

小園「（引きつった笑顔で）駄目」

フミ「一つぐらいくれたっていいだろ！」

小園とフミ、おにぎりを奪い合う。

○多摩川・河川敷（夜）

ブルーシートと段ボールで出来た掘立
小屋が並ぶ。

○同・同・小園の掘立小屋（夜）

物で溢れ、雑多な印象の室内を月明か
りが照らす。

小園、色褪せた一枚の写真を手にして
いる。

写真には若き日の小園と佃、そして弥
英子が笑顔で写っている。

小園、写真を見詰める。

○多摩川・堤防（朝）

通勤・通学の人々が行き交う。

○同・河川敷・小園の掘立小屋（朝）

フミの声「修さん、近くの公園で炊き出しや
るって話だよ。一緒にどうだい？」

入り口から顔を出すフミの目に、布団

の上で吐血し、意識を失った小園の姿が飛び込む。

フミ「修さん！！」

フミ、小園に駆け寄る。

○慶南大学附属病院・救急外来入口前

一台の救急車が停まっている。

中から担架に乗せられた小園が救急隊

員と共に出てくる。

フミ、小園に付き添いながら、

フミ「修さん、しっかりするんだよ」

建物へと入っていく小園たち。

○同・スタッフルーム

時計は十五時過ぎを指している。

田所（26）が、一枚のレントゲン写

真を厳しい表情で見詰めている。

佃の声「これは酷いな」

佃、田所の後ろからレントゲン写真を

覗き込む。

田所「（振り返り）先生」

佃「末期のスキルス胃癌か。しかし、こんな

になるまで放っておくとは。一体、誰の」

田所「昼前に運ばれてきたホームレスです」

田所、佃にカルテを手渡す。

佃、カルテに書かれた『小園修二 昭

和三十年三月二十三日生』という文字

に目を奪われる。

田所「先生？」

佃「（田所に目を遣り）うん？」

田所「どうかされましたか？」

佃「いや」

佃、カルテに再び目を落とす。

○佃の自宅・二階寝室（夜）

午後十一時過ぎを指す時計の針。

弥英子、ベッドに入り、一枚の画用紙

を手に取っている。

画用紙には若き日の弥英子の横顔を捉

えたデッサン画が描かれている。

扉が開く音がし、弥英子、咄嗟に画用紙を折りたたみ、枕の下に隠す。

佃が部屋に入ってきて、

佃「何だ、まだ起きてたのか」

弥英子「ええ。お帰りなさい、貴方」

佃、ネクタイを緩めながら、

佃「なあ、弥英子」

佃、弥英子を見詰める。

弥英子「どうかした、貴方」

佃「（弥英子から視線を外し）いや、やっぱり

何でもない」

弥英子、ネクタイを外し、着替えだす

佃に怪訝な表情を向ける。

○慶南大学附属病院・五階エレベーター前

佃、白衣のポケットに手を入れ、エレ

ベーターを待っている。

扉が開き、中の小園と目が合い、驚く

佃。

○ 同・降下するエレベーター内

佃と小園の二人だけである。

佃は階数を示す表示灯から目を離そうとしない。

小園「（壁にもたれながら）まさか、兄貴の病院だったとはな。弥英、義姉さんは元気なのか」

佃「（表示灯を見詰めながら）うん？ ああ」

小園「そうか。今も昔と変わらず、さぞ綺麗なんだろうな」

佃「ああ、皺は増えたけどな。それより、今まで何してたんだ。弥英子を残したまま、突然居なくなったりして、俺と弥英子がどれほど心配したか」

小園「ふっ、よく言うよ」
佃、小園を振り返る。

小園「俺が居なくなっって、一番ホッとしたのは兄貴のくせして。そういう兄貴の優等生ぶるところ、昔から好きにはなれないよ」

佃「なっ……」

エレベーターの止まる音がし、扉が開く。

小園「それじゃ」

小園、エレベーターを降りて行く。

扉が閉まり、立ち尽くす佃。

○佃の自宅・二階寝室（夜）

消灯された室内。

佃、ベッドの中で寝付けずにいる。

佃、隣で横になる弥英子に、

佃「なあ、起きてるか？」

弥英子「（背を向けたまま）どうしました？」

佃「修二の奴だが、生きてたよ」

弥英子、枕元の照明を点け、驚きの表

情で佃を見る。

佃「（動揺を隠せない弥英子を見て）その様子

だと、やはりお前の中にはまだアイツが」

弥英子、視線を背け、

弥英子「別に、そんなんじゃない」

佃、体を起こし、煙草を手取る。

佃 「何十年も行方知れずで、死んだものだと思つていたのに、今になって現れて」

佃 「アイツが今、何してるか分かるか？」

弥英子、佃に視線を向ける。

佃 「絵描きの夢も途中で投げ出して、好き勝手した挙句がホームレスだぞ。笑わせるだろ？」

佃、鼻から煙草の煙を吐きだす。

佃 「しかも、末期の癌でウチの病院に今、入院してるよ」

弥英子 「そんな……助からないんですか？」

佃 「来週手術だが、恐らくは」

弥英子 「でも、貴方が手術すれば……勿論、

執刀なさるんでしょ？」

佃 「（首を横に振りながら）若い医者に任せるよ」

佃、煙草を灰皿の中で揉み消す。

弥英子 「何故です？」

弥英子、佃を不審に満ちた目で見る。

佃 「何だ、その眼は？ 俺が、お前の事でア
イツに嫉妬して手術を拒んだと思ってるの
か？」

弥英子、視線を外し、黙る。

佃 「馬鹿馬鹿しい！ 誰がやっても、もう手
遅れだ。今度の手術だって、何も出来ずに
閉じて終わるのがオチだ」

弥英子、不貞腐れた様子で佃に背を向
け、布団に潜り込む。

佃、呆れ顔で、枕元の照明を消すと、

布団に潜り込む。

佃、弥英子の腰に手を回すが、佃の手

を払いのける弥英子。

佃、寝返りを打ち、弥英子に背を向け
る。

○慶南大学附属病院・小園の病室

数名の入院患者との大部屋。

窓際の一角に小園のベッドがある。

小園を見舞うフミ。

フミ「今日のは上物だよ。何せ、ほら。袋と
じが、この通り無傷ときたもんだ」

フミ、週刊誌の未開封の袋とじのペー
ジを開き、小園に見せる。

小園、週刊誌を手に取ろうとするが、
フミ、週刊誌を自分の方に引き寄せ、

フミ「手を出し」手に入れるのに苦労したん
だ。タダって訳にはいかないよ」

小園「呆れた様子で」フミちゃん……」

フミ「冗談だよ。まあ、精々楽しみな」

フミ、週刊誌を小園に手渡す。

咳ばらいが聞こえてくる。

フミが振り返ると、フミに険しい顔を

向ける佃の姿。

フミ「小声で」じゃあ、もう帰るね」

小園「（小声で）有難う、フミちゃん」

フミ、回診中の佃と女性看護師に、会
釈して部屋を出ていく。

女性看護師はフミに会釈を返すが、佃
は無視し、入院患者の診察を続ける。

○ 佃の自宅・二階寝室（早朝）

時計の針は午前五時前を指している。

ベッドで寝息を立てる佃。

その隣に弥英子の姿は既がない。

○ 同・キッチン（朝）

佃、キッチンテーブルで朝刊を手にな、

珈琲を一口。

弥英子、忙しそうにテーブルに朝食を

並べる。

淑子、キッチンに入ってきて、

淑子「博己さん、お早う」

佃「お早うございます、お義母さん」

淑子、席に着き、

淑子「そう言えば、弥英子。あんだ、今朝早

く何処かに出かけなかったかい？」

弥英子の手が止まる。

弥英子「えっ？」

淑子「玄関から出ていく音がしてたから。あ

の足音はあんだだと思うんだけどね」

弥英子「あ、うん。ちょっとね」

淑子「何だい。またダイエットの為に、歩き

出したのかい」

弥英子「え、うん。最近、お腹周りが気にな

って」

淑子「続くといいけどね。アンタは飽き性な

ところがあるから」

弥英子「（苦笑いを浮かべ）そうね」

佃、弥英子を怪訝な表情で見詰める。

○佃の自宅・外観（早朝）

小雨がシトシト降っている。

○同・二階寝室（早朝）

時計の針は午前五時前を指している。

弥英子、ベッドから起き上がり、着替

えを済ますと、物音を立てずに部屋を

出ていく。

目を開ける佃。

○ 神社・境内（早朝）

弥英子、肩で傘を差しながら、本殿に向かつて、手を合わせる。

弥英子「どうか、修二さんを御救い下さい」

弥英子、一礼を終え、手の中の御守りに視線を落とす。

裸足で再び、鳥居に向かつて歩き出す

弥英子。

× × ×

佃、傘を差し、物陰から鳥居と本殿の往復を繰り返す弥英子の姿を窺う。

佃、傘を持つ手に力が入る。

雨がシトシト降り続く。

○ 佃の自宅・玄関（夜）

佃、泥酔した様子で帰宅する。

佃、上がり框に腰を下ろし、ネクタイを緩めると、物憂げな表情を浮かべる。

○ 同・二階寝室（夜）

半開きの入口の扉。

ベッドに腰を下ろし、デッサン画を見

詰める弥英子。

佃の声「弥英子」

弥英子、顔を上げると、入口の傍に立

つ佃の姿。

弥英子、慌ててデッサン画を後ろ手に

隠すと、

弥英子「貴方、帰ってたの？　ただいまぐら

い言つてくださいな」

佃「今、後ろに隠したのは何だ」

弥英子「いえ、これは別に」

佃「いいから見せろ！」

佃、弥英子に詰め寄る。

佃、抵抗する弥英子からデッサン画を

奪い取ると、

佃「（デッサン画に目をやり）お前、まだこん

なもの」

弥英子「お願い、返して頂戴！」

佃、奪い返そうとする弥英子を突き倒

す。

佃 「お前、やはりまだ修二のこと」

弥英子 「（顔を伏せ）……」

佃 「ええ、どうなんだ！」

佃 、床に座り込む弥英子の両肩を掴み、

詰め寄る。

弥英子、泣き崩れる。

佃 、立ち上がり、デッサン画に目をや

ると、

佃 「こんなもの！」

佃 、デッサン画を破り捨て、部屋を出

ていく。

紙片が散らばる床に泣き崩れる弥英子。

○路上（夜）

舗装工事のカラーコーンが並んでいる。

佃 、覚束ない足取りでその傍を歩いて

いる。

佃 「くそっ！」

佃 、カラーコーンの一つを蹴り飛ばし、

再び覚束ない足取りで歩いて行く。

○ 佃の自宅・外観（朝）

T・手術当日。

○ 同・玄関（朝）

佃、シューホーンを使い、革靴を履くと、扉のノブに手をかける。

弥英子の声「あなた、ちよつと待って」

廊下の奥から駆け寄る弥英子。

弥英子、エプロンのポケットを探り、

弥英子「これ、その……修二さんに」

弥英子、佃に御守りを差し出す。

佃「（御守りをジッと見詰め）ああ」

佃、御守りを受け取ると、足早に玄関を出ていく。

○ 慶南大学附属病院・中庭

春の日差しが降り注ぐ中、職員や入院患者で賑わう。

○ 同 ・ 佃 の オ フ ィ ス

佃 、 窓 際 に 立 ち 、 御 守 り を 見 詰 め る 。

× × ×

（ フ ラ ッ シ ュ ）

雨 の 中 、 本 殿 と 鳥 居 の 往 復 を 繰 り 返 す

弥 英 子 の 姿 。

× × ×

佃 、 御 守 り を 白 衣 の ポ ケ ッ ト に 押 し 込

み 、 部 屋 を 出 て い く 。

○ 同 ・ 屋 上

佃 、 小 園 を 乗 せ た 車 椅 子 を 押 し な が ら

フ ェ ン ス 際 へ と 移 動 す る 。

佃 と 小 園 、 屋 上 か ら の 景 色 に 目 を や る 。

佃 、 白 衣 の 胸 ポ ケ ッ ト か ら 煙 草 を 取 り

出 し 、 口 に 銜 え る 。

小 園 に 勧 め る が 、 小 園 、 苦 笑 い を 浮 か

べ 首 を 横 に 振 る 。

佃 、 景 色 を 見 詰 め 、 鼻 か ら 煙 を 出 す 。

小 園 「 な あ 、 兄 貴 」

佃 「うん？」

小園 「俺、兄貴が羨ましくて仕方ないよ」

佃 「どうした、急に」

小園 「兄貴は大学病院の教授で、地位も名誉

もあつて、その上、弥英、義姉さんを嫁に

貰つてさ。それに比べて俺は」

小園 、握り拳を作り、震わせる。

小園 「俺が何故、兄貴たちの前から忽然とい

なくなつたか……兄貴、分かるか？」

小園 、佃を見上げる。

小園 「兄貴と違つて、俺はガキの頃からの落

ちこぼれで、かたや兄貴は勉強も運動も一

番でさ。兄貴と比較される度に、俺はいつ

も引け目を感じてた」

佃 「……」

小園 「そんな俺が唯一兄貴に勝てるもの、そ

れが絵を描くことだった。絵だけは幼い時

から、誰にも負けない自信があつた。もっ

と上手くなろうと必死で絵を学んだよ」

佃 「お前の絵に対する情熱は、俺や他の皆も

認めてたよ」

小園「でも、現実には情熱だけでどうにかなる

程甘くはなくて。自分の才能の無さに気付

いた時、俺は絵描きの夢と共に、兄貴に対

抗できる唯一の手段を失った。兄貴がずっ

と義姉さん、いや」

小園、首を横に振り、

小園「弥英子の事を想ったことは知ってた。

だから兄貴に太刀打ちできないと悟った俺

は、自ら」

小園、肩を震わせ、

小園「こんな体になるのが分かってたら、あ

の時もっとうゝクソッ！」

小園、自分の太腿を殴りつけ、背中を

震わせ泣き出す。

佃「修二……」

佃、小園の背中に左手を添えると、白

衣のポケットに右手を入れ、

佃「修二、実はお前に」

小園、顔を上げ、

小園「兄貴。兄貴みたいになんでも手にしてる人間は、他人に嫉妬したことなんてないだろ」

佃の右手が、ポケットの中で止まる。

小園「俺みたいな人間の気持ち、兄貴には一

生分かんねえよ」

佃「（腕時計に視線をやり）さあ、もう行かないと。続きは手術の後だ」

佃、車椅子を押し、足早に歩いていく。

○元の西多摩霊園（夕）

佃、修二の墓をジッと見詰める。

佃、ポケットから御守りを取り出し、

佃「修二、悔しいが俺の負けだ。弥英子の心

の中にはお前がずっといたよ。これ、渡せ

ずにいてすまなかった」

と、墓前に御守りを供える。

× × ×

誰もいなくなった修二の墓前。

西日が墓前の御守りを照らす。（了）